

# すべての男性の悩み 男性更年期と前立腺疾患について



○講師 杉元幹史先生（香川大学医学部泌尿器科教授）

○座長 田中眞治先生（生協みき診療所 所長）

## 記

- ◆ 日時：2021年11月27(土) 19:00～20:20
- ◆ 会場：ホテルマリンパレスさぬき 2F 屋島 A  
(高松市福岡町 2-3-4) 無料駐車場有
- ◆ 参加費：会員・スタッフ 無料 未入会員 5,000 円
- ◆ 定員：30名



WEB 併用

## 【講演抄録】

加齢ともなって男性ホルモンは減少します。これによってうつ症状や易疲労感、集中力の低下や勃起不全など様々な症状が出るようになってきます。この一連の症状を「男性更年期」として認識されたのはそれほど昔のことではありません。男性にとってテストステロンは今まで考えられていたよりはるかに重要なものだということがわかってきました。ほとんどの患者さんは、「若い頃はこんなことなかったのに」といわれます。またこのような症状はすべて歳のせいだと諦めている方も少なくありません。しかし、これらは専門家による適切な治療によって改善します。

前立腺疾患には良性の前立腺炎や前立腺肥大症と、悪性の前立腺癌があります。前立腺肥大症については、近年の薬剤のめざましい進歩によって手術をしなければならない患者さんは激減しています。一方、前立腺癌患者は年々増加しています。現在わが国では 7-8 人に一人の男性が生涯のうちで前立腺癌と診断されるほどです。その原因のひとつが食生活の欧米化です。高脂肪、高タンパク、高カロリーの食事の普及は前立腺癌を増加させる要因であることがわかっています。また典型的な高齢者癌である前立腺癌は、人口の高齢化も疾患が増加している原因です。さらに診断ツールの開発、PSA(前立腺特異抗原)の普及です。PSA によって前立腺癌は以前とは比べものにならないほど早期に発見できるようになりました。そのおかげで多くの前立腺癌は、手術や放射線治療によって根治可能になりました。その一方、PSA のせいで「見つけすぎ」状態になっています。すなわち過剰診断です。命に関わらないような前立腺癌まで見つけてしまうため過剰治療を引き起こしており、それが大きな社会問題となっています。この問題に対してわれわれはどう立ち向かっているのかということもお話したいと思います。

毎年のように新規薬剤や治療器機が登場しており、近年の泌尿器科治療の進歩は目を見張るものがあります。われわれ専門家は決して過剰や過小に偏らない、世界的エビデンスに基づく公平で理性的な診療を目指す社会的責務があると考えております。

【略歴】昭和63年3月 香川医科大学(現香川大学医学部)卒業  
昭和63年4月 香川医科大学大学院入学  
平成4年3月 同大学院卒業 博士号取得  
平成4年4月 香川医科大学附属病院泌尿器科助手  
平成9年7月 坂井市立病院泌尿器科部長  
平成18年1月 香川大学医学部附属病院泌尿器科部長  
平成19年10月 同 附属病院泌尿器科・副腎・腎臓外科准教授  
平成21年9月 香川大学医学部泌尿器科准教授  
平成24年 MD アンダーソン 癌センター 短期留学  
平成30年7月 香川大学医学部泌尿器科教授  
【所属学会等】日本泌尿器科学会(代議員)/西日本泌尿器科学会(評議員)  
/西日本泌尿器科学会/日本泌尿器内視鏡学会(代議員)/日本泌尿器腫瘍学会  
(代議員)/日本癌治療学会(代議員)/日本癌治療学会(1972)/日本癌学会  
(4354)/癌腫瘍学会(07-0082)/日本内視鏡外科学会(540-421-0159)  
/日本Men's Health 医学会(100540)/老年泌尿器科学会/日本排尿機能学会(NBS:  
1596/H20W)(代議員)/米国泌尿器科学会(AUA)/米国臨床腫瘍学会(ASCO)/国際泌尿  
器科学会(SIU)/欧州泌尿器科学会(EAU)  
泌尿器科遠隔手術支援施設認定/治療支援施設泌尿器科ロボット支援手術プロクター  
/5-045-IRP(2015.4.1-2020.3.31)/International Journal of Clinical Oncology (IJCO)  
Editorial Board/International Journal of Urology(IJU) Editorial Board/第53回日本  
癌治療学会学術集会:優秀録(2015)

お申込は香川県保険医協会まで Fax 下さい Fax 087-802-1336( 2021年11月27日)

医療機関名	ご氏名
ご住所	TEL fax
WEBでご参加の先生はメールアドレスをご記入ください。	
@	